

日本語教育の表現研究への貢献

木戸 光子

2010年も含めた近年の動向として単発的研究ではなく継続的研究を取り上げる。日本語教育に直接・間接に関係し、日本語教育学としての研究理念と方法の確立が期待できる研究を紹介する。

1) 文章・談話のジャンル

日本語学習者が大学・大学院の学術的活動に必要な日本語を特定するという目的のために、論文や講義などの文章・談話が日本語教育では研究対象となっている。これらは従来の表現研究では対象にならなかった文章・談話である。模範的文章ではなく一般的かつ実用的な文章・談話に潜む構造や表現の特徴を分析し記述する。学習者が文章・談話を理解し表現するために、日本語の文章・談話のジャンル特性を明らかにしている。ジャンル別の文章構造や表現の特徴の解明も進んでいる。佐久間(2010)の講義談話の分析、村岡貴子氏の理系論文構成の分析、鎌田美千子氏のレジュメの箇条書きや作文表現のパラフレーズ分析がある。

2) 文章・談話からみた文法

品詞によらない言語形式の意味用法の解明が進んでいる。藤田・山崎(2006)の複合辞研究、接続詞と同等の機能を有する接続語句、話し言葉で使用される表現、連語やコロケーションへの着目などである。村田年氏は助詞相当句や接続語句など文型の出現頻度と文章ジャンルとの関係を統計的手法で解明している。馬場(2010)の接続詞研究の概観は広義の接続機能を担う表現を含む。

3) 相互行為の中での文法、ストラテジー
創発的文法(Emergent grammar)の影響を受けた日本語母語話者や日本語学習者の会話分析も進んでいる。相互行為の中で文法やストラテジーが生み出されていく様相を解明する。会話の相互行為の中で分裂文を分析し考察した森純子氏の論考、ポリー・ザトラウスキー氏の非言語行動を含む会話分析などがある。

以上3つの潮流の基にあるのは、日本語学で受け継がれてきた伝統的な文法範疇の限界である。複合辞や話し言葉に見られる表現の研究は実際に日本語を運用するための文法規則や談話ストラテジーの解明という日本語教育の必要性から出てきたものである。語、文のような言語単位、品詞のような文構造の文法範疇では分析・記述は難しい。

また、日本語学習者という非母語話者が日本語の言語共同体の一員となる社会変容も基にある。多文化共生という観点から日本語の表現を捉えると、日本語学習者もまた日本語話者の一員なのである。「学習者＝内なる他者」という客観的な視点から日本語の特性を再発見することが、「内的対照研究」ともいふべき日本語教育による表現研究の意義だと考える。

引用・参考文献

木戸光子「作文」『計量国語学事典』計量国語学会編、朝倉書店、2009年／佐久間まゆみ編著『講義の談話の表現と理解』くろしお出版、2010年／馬場俊臣編著『現代日本語接続詞研究—文献目録・概要及び研究概観—』おうふう、2010年／藤田保幸・山崎誠編著『複合辞研究の現在』和泉書院、2006年

(筑波大学)